

第 7 3 回全国男鹿駅伝競走大会

【出場結果】

実施日：6月27日(土) 8時00分スタート

コース：男鹿総合運動公園～なまはげ直売所～八望台～入道崎～戸賀コミュニティセンター
～加茂(桜島駐車場)～椿漁港～男鹿駅～男鹿総合運動公園

総距離：8区間 64.8km

成績：3時間 22分 45秒 2/29位

出場者・リザルト：

1区	8.7km	下田 大翔	2/29位	27'15"
2区	6.0km	三浦 剛	2/29位	19'58"
3区	8.1km	内田 翔也	3/29位	24'28"
4区	9.2km	加藤 平	2/29位	27'59"
5区	7.5km	関口 大樹	2/29位	24'50"
6区	11.7km	救仁郷弓揮	4/29位	37'04"
7区	9.3km	坪井 響己	2/29位	28'20"
8区	4.3km	親崎 達朗	2/29位	12'48"

【レポート】

大会が開催された秋田県男鹿市は、男鹿半島に伝わる伝統行事「男鹿のナマハゲ」が国の重要無形民俗文化財に指定され、ユネスコ無形文化遺産にも登録されていることで知られています。

今大会では、数年ぶりに開会式で「なまはげ太鼓」の勇壮な演奏が披露され、大会の開幕に華を添えました。

また、今大会より従来の7区間制から8区間制へと変更され、これまでのアンカー区間が2区間に分割される新たなコース編成となり、少数精鋭の当社にとっては、選手を揃える面で苦心もありましたが、一般の部3連覇を目標にレースに臨みました。

当日は曇り空で日差しもなく、走るには絶好のコンディションとなり、午前8時00分、大学の部14チーム、一般の部29チームが男鹿総合運動公園を一齐にスタートしました。

序盤の流れを左右する1区には、迷うことなくエースの下田を起用しましたが、大学の部を含めた先頭集団は序盤からスローペースでレースが進み、各チームとも互いの出方を探る展開に。

ここでレースを動かしたのは下田で、3km過ぎの急勾配の坂で一人ピッチを上げ、一気に先頭へ立ってレースを先導し、突然のスパートに意表を突かれた大集団も徐々にペースを上げて追いかけてますが、下田との差はなかなか縮まらず、そのままリードを保つ展開が続きました。

下田はラスト2kmで集団に吸収されたものの、最後まで粘り強い走りを見せ、一般の部では、同じ朝霞市に拠点を置くコモディイダの選手に9秒差をつけられましたが、大きく離されることなく僅差で2区の三浦に襷をつなぎ、1区としての役割を十分に果たしてくれました。



大学の部・一般の部の選手が一斉にスタート！



1区で好走をみせた下田

2区は6.0kmと全区間の中では短めの区間ですが、コース後半は中継所のある八望台まで急勾配の上り坂が続くため、上りの走りが勝負を左右する重要な区間で、そのため、力強い走りを持ち味とする三浦を起用しました。

三浦は、序盤の下り坂をあえて抑え気味のペースで入り、その影響で前方を走るコモディイイダとの差は一気に広がり、姿を捉えられないほどの距離となりましたが、コース後半の急勾配では持ち前の力強い走りを発揮し、粘り強く走り切って、中継所のある八望台で待つ3区の内田へ襷を渡しました。

コモディイイダとの差は、この時点で約1分まで広がり、レース序盤にして3連覇へ向けて厳しい展開となりました。



急勾配の坂を力強く駆け抜けた三浦

3区は中継所のある八望台からの下り坂が続く、コース全体が下り基調となりますが、如何にブレーキをかけずに下り坂を駆け降りられるかがポイントとなります。

3区には社会人デビュー戦となる内田を起用しました。

内田は、入社後早々に針治療が原因で肺気胸となるアクシデントに見舞われ、暫らく走れない状態が続きましたが、本大会に向けて急ピッチでコンディションを整えてきました。

その内田は襷を受け取り、下り坂を勢いよく走りだすと、前方を走る大学の部のチームにすぐさま追いつき勢いのある走りを見せます。

このまま勢いのある走りで突き通すかに見られましたが、中盤以降はコンディションも完全ではない中、表情も険しさを増し苦しい展開に。

苦しい展開とはなったものの、社会人デビュー戦にかける想いは強く、最後はもがきながらも、必死に身体を前に進めて4区に加藤に襷を渡しました。

先頭を走るコモディイイダとの差は2分20秒差まで開き、見えない相手を追いながらレースは中盤に入ります。



社会人デビュー戦を疾走する内田



チーム最年少の内田から最年長の加藤への気持ちのこもった禪渡し



チームのエース格としての役割を十分に果たしてくれた加藤

4 区には、チーム最年長の加藤を起用し、男鹿駅伝を走るのは 7 年ぶりとなりましたが、チームのエース格としての力強い走りに期待が高まります。

加藤は終始リラックスしたフォームを保ちながらも、力強い走りを披露し、前方を走る大学の部のチームに追いつくと、しばらくは並走を続けましたが、中盤以降にペースを引き上げて一気に引き離して単独走に。

その後、前方の選手を視界に捉えることは出来ませんでしたが、その力強い走りは最後まで衰えることなく、5 区の関口へ襷を渡しました。

加藤の走りは、区間賞の獲得も期待されましたが、コモディイイダの選手にわずか 5 秒及ばず、区間賞こそ逃しましたが、加藤の力強い走りはチームに再び勢いをもたらしてくれました。



加藤から関口の襷リレー

5 区は、前半こそ海岸沿いのフラットなコースが続きますが、中盤以降は急勾配の上り坂が連続するタフな区間で、ここにはロードでの安定した走り定評のある関口を起用しました。

関口は、序盤に広がる海岸沿いのコースをリズム良く走り、中盤にはコース最大の難所である S 字カーブの急な上り坂へと入ります。

ここからは厳しい上りが続き、走力だけでなく精神力も試される展開となり、苦しい状況の中でも、関口は監督車からの声かけに応えるように腕を力強く振って一步一步着実に前へと進め、最後は折れそうになる気持ちを奮い立たせながら走り切り、6 区の救仁郷へ襷を渡しました。

気持ちのこもった力走は見せたものの、コモディイダとの差はさらに約 1 分広がり、その差は 3 分 30 秒に。レースはいよいよ後半戦へと入ります。



諦めない精神力を見せ、急勾配のコースを走りきった関口

6 区は、この駅伝最大の難所とされる区間で、200m 以上の標高差を一気に駆け上がる急勾配が続く、全国的にも類を見ない過酷なコース設定となっており、各チームともエース級の選手を配置する傾向があるため、当社も 2 年連続で救仁郷を起用しました。

救仁郷は春先から積極的に 10000m のレースへ出場し、安定した成績を残してきたチームのエース格として、区間賞を狙う走りが期待されました。

レースでは、連続する急な上り坂と下り坂を持ち前の安定したフォームで攻略し、前方のチームを懸命に追いかけます。

前を走るチームの姿が見えない苦しい展開が続きましたが、ラスト 3km 付近で視界が一気に開け、約 300m 先を走る大学の部のチームをようやく視界に捉えました。

救仁郷は最後の力を振り絞って前を追いましたが、その一方で後方からも大学の部のチームが迫り、7 区の坪井が待つ中継所では約 200m の間に 3 チームがひしめく接戦となりました。

区間賞にも期待がかけられましたが、コモディイイダの選手には 2 分差をつけられる結果となり、男鹿駅伝屈指の難コースを攻略することの難しさを、改めて痛感させられる区間となりました。



激しい急勾配を駆け上る救仁郷

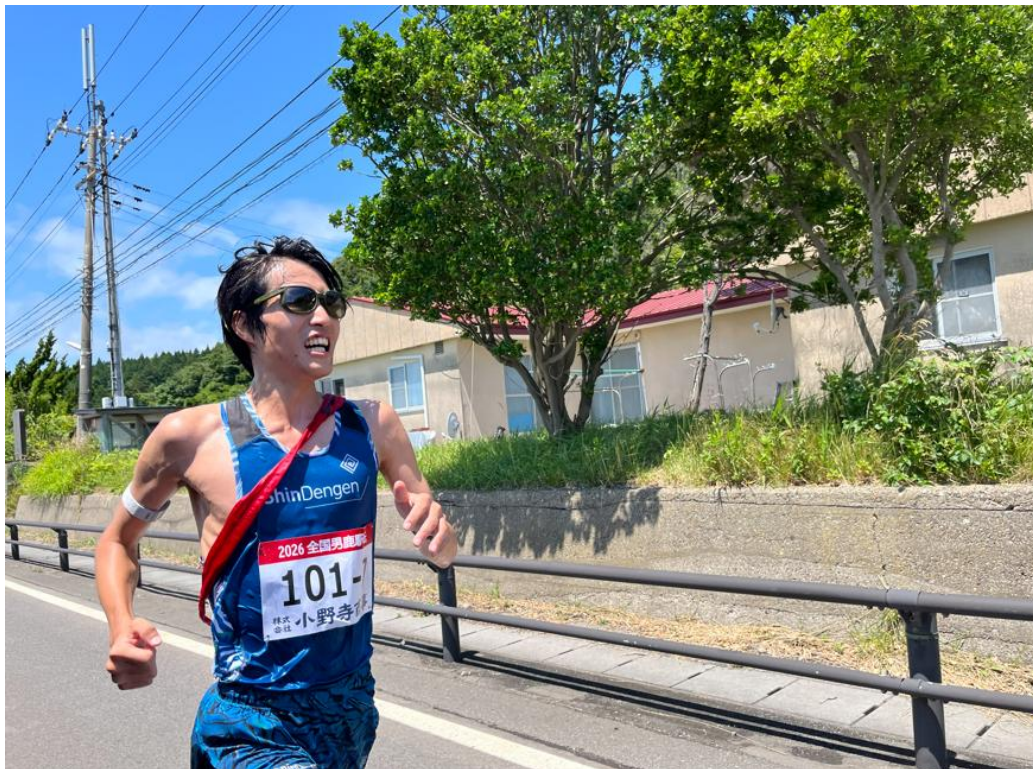


登り坂と下り坂が交互に来る難コースを疾走する救仁郷

7区には坪井を起用し、坪井はチームでエース格の実力を持つ選手ですが、今シーズンは、怪我や体調不良などのアクシデントが続き、前半シーズンのトラックレースでは本来の走りを発揮できずにいる中で、今大会で復調の兆しを示す走りが期待されました。

坪井は、大学の部の2チームとの接戦の中でレースを進め、中盤以降は抜きつ抜かれつのスリリングな展開が続き、一時は競り合いから後れを取る場面もありましたが、持ち前の粘り強さを発揮して再び食らいつきます。

終盤は実業団選手としての意地を見せる力強い走りで前へ出ると、最後は大学の部のチームを数秒引き離し、8区で待つアンカーの親崎へ襷を渡しました。



競り合う展開の中、維持の走りを見せた坪井

8区のアンカーには親崎を起用し、親崎は3月に出場した東京マラソン前から脚に力が入らない症状に悩まされ、思い描いたトレーニングができない日々が続いていました。

今回の駅伝も出場が危ぶまれましたが、懸命なリハビリと調整を重ね、何とかスタートラインに立つことができました。

レースでは、後方から追い上げてくる大学の部の2チームを意識し、序盤から積極的なペースを刻みましたが、中盤以降に追いつかれると、終盤まで3チームが競り合う緊迫した展開に。

ラスト1kmにある急勾配の坂で、親崎が渾身のロングスパートを仕掛け、一度は後続を引き離したものの、ラスト300mで再び追いつかれると、最後はスパート力の差で大学の部の選手に先行を許しました。

それでも粘り強い走りでフィニッシュし、一般の部では2位を確保してのゴールとなりました。



序盤は快調なペースを刻む親崎



一般の部 2 位でゴールに向かう親崎



「駅伝」を通じてALL新電元で戦うことが出来ました！！

【総括】

3連覇を目標に臨んだ今大会でしたが、結果は強化実業団チームであるコモディイダに7分もの大差をつけられての2位となり、さらに区間賞を一つも獲得することができず、「完敗」と言わざるを得ない結果となりました。

11月に開催される東日本実業団駅伝には、コモディイダをはじめ、ニューイヤー駅伝出場を目指す強化実業団チームが数多く集うため、今回の結果を現時点での実力として真摯に受け止め、本番まで一人ひとりが課題と向き合い、さらなる力を身につけていきたいと考えております。

一方で、前回の大会と比較して総合タイムを3分短縮できたことは、チームとして着実に力をつけている証でもあり、この成果を前向きな材料と捉え、これから迎える厳しく暑い夏のトレーニングを乗り越えて、チーム一丸となってさらなる成長を目指して参ります。

また、今回も当社の半導体マザー工場である秋田新電元の皆さまに全面的なご支援をいただき、選手・スタッフとともに競技に集中できる素晴らしい環境の中で大会に臨むことができました。

フルタイムで業務に従事しながら競技を続ける私たちにとって、グループ会社の皆さまと交流を深め、業務の枠を超えて一体感を実感できることは、競技を続けているからこそ得られる貴重な経験であり、このような機会を通じて得られる人とのつながりや経験は、競技生活はもちろん、その先の社会人としての人生においても大きな財産になると感じています。

最後に、監督車から選手達へ熱い声援を送って頂いた田中社長、佐々木常務をはじめ、秋田新電元の皆さま、関係者の皆さまに、この場をお借りして、あらためてお礼申し上げます。

引き続き皆さまの温かいご支援ご声援のほど、何卒宜しくお願いいたします。